

---

# ツヴァイ 第9章「転機」

小箱町まりあ

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

ツヴァイ 第9章「転機」

### 【Nコード】

N2362W

### 【作者名】

小箱町まりあ

### 【あらすじ】

手首を切った私には、あの点滴が待っていた。が、それも地獄であつた。

私と園子とマドンナ。(前書き)

手首を切った私は点滴へ、でも、そこでも虐待が待っていた。

## 私と園子とマドンナ。

ツヴァイ・・・ようやく、貴方に会えたね。会いたかった。

### 第9章「転機」

錆びたカミソリで切ったわりには痛みはなかった。思いっきり切ったのに血はたいして出なかった。私はこんなはずじゃなかったのに・・・と思っただけでした。それで、死ねないのなら血を止めなければ・・・と思い、2階から1階にいる母に

「お母さん、バンソーコー、持ってきて。」

と言いましたが返事がありません。それで、もう1度

「お母さん、バンソーコー。」

と言っただけ、やはり返事がありません。それで、しびれをきらした私は下に下りて行って、親に手首を見せたのでした。すると、親は驚いて、父が

「おい、包帯。」

と母に言いました。そして、母が包帯を持ってくると父はまず、腕を止血し、それから、左手首にぐるぐると包帯を巻いたのでした。

そして、車は私を乗せて竹城病院に向かいました。

病棟に着くと、夜勤の医師が手首を縫い、そして、

「点滴。」

と看護婦さんに指示を出しました。私は独房のベットに寝かせて、再び手足を縛られたのでした。

そして、点滴づくめの日々がやってきました。私は目を開けたくなくて、ずっと目を閉じていました。来る日も来る日も点滴で、だんだん、点滴に戻るのが良かったのか自分で自分に自信がなくなってきたのでした。

そして、そんな日々の夕方頃、私は看護婦さん達から、性的虐待を受けるのでした。それは屈辱以外の何物でもありませんでした。始

めは膾に指を入れられて、次にクリトリスを弄ばれたのでした。私は声を上げずにじっと耐えていました。そして、去り際に看護婦さん達は

「これが・・・くせになる人もいるのよね。フフ・・・。」

と言っていったのでした。私は点滴にこんな屈辱が待っているとは思ってもありませんでした。

そして、次の朝、私が目を瞑っていると、別の看護婦さんがやってきて

「・・・さん、・・・さん。」

と言って私の頬をバシバシ叩くのです。その叩くのが終わった後、私は久し振りに目を開けました。そして、「もし、一生このままだったら、どうしよう・・・。」という不安が襲ってきました。そこで、私は大きな声で看護婦さん呼びました。そして、来た看護婦さんに

「これからは退院目指して頑張りたいので、点滴を外して欲しい。」

と訴えたのでした。そして、主治医が来て

「すぐに点滴を外すのは無理だけど、真面目に食事するっていうなら出しますよ。」

と言ってくれ、私の手足の紐は解かれ、手足は自由になったのでした。そして、食事もあるようになりました。しばらくして、元の病室に戻ったのでした。そうしたら、主治医が私に

「ちゃんと食事を食べるようにになったら、退院させてあげますよ。」

と言ってきて、それを聞いた私は・・・という悪い考えが起き、実行移したのです。そして、おだやかな日々を送っていたら、病院の広い院庭を皆で散歩する事になりました。その頃、私には2個上の園子という友達が出来ていたのでした。そして、園子と一緒に散歩していると、見た事もない男性患者が園子に絡んできたのでした。

すると、私は突然「ツヴァイ」になり、男性患者に園子を守るために、口で対抗して追い払ったのでした。そして、事が終わると私は私に戻っていて、ツヴァイの事は忘れて散歩に戻ったのでした。この事が後にある男の子との出会いをもたらすとは夢にも思っていないのでした。そして、散歩から帰ると、私は主治医に呼ばれたのでした。主治医は私を見るなりこう言いました。

「・・・さん、散歩で何か変わった事はありませんでしたか。」

と。だから、私は

「別に何も変わった事はなくて、とても楽しかったです。また、お散歩がしたいです。」

と答えたのでした。でも、それは決して演技ではありませんでした。すると、主治医は

「引率した看護婦さんから聞いたのですが、途中、貴方に変わった事があったとか・・・。」

と言い、私は

「・・・変わった・・・事。」

と暫く考え、そして、気がついていたら

「ツヴァイだあ・・・。」

と言っていたのでした。それを聞いた主治医は

「ツヴァイって何の事ですか。」

と聞いてきたので、私は

「話す換わりに1つ条件があります。それは、この病院は大きいのだから、私と同じタイプ人間に会わせて下さい。」

と言ったのでした。そして、私はツヴァイにかんじて知っている事をすべて話したのでした。そして、

「そういう子は何千人に1人の割合で生まれてきて、貴方はその1人でしょう。この病院にもそういう男の子が1人いますよ。時期がきたら会わせてあげますよ。」

と言われて診察室を出たのでした。そして、部屋に戻ると園子が一体何だったのと聞いてくるので、私はこの友人にツヴァイの事を話したのでした。それから、日にちが経ち彩香から手紙が届いた。そこには何と、来日するマドンナのコンサートに行くと言われていた。私もマドンナのファンなので羨ましくて、早速、彼女に電話をしたのでした。

「マドンナのコンサートに行くんだって、良いなあ。ところで、誰と行くの。」

と言つと、彩香は受話器越しに

「うん、あんたと。」

と言つではありませんか。私はすっかり驚いて、今いる状況を説明しようと思つたのでした。だから、私はしどろもどろに

「実は・・・今いる・・・所が・・・簡単に・・・外に出られる・・・場所じゃな・・・くて・・・その・・・。」

と言つと、彩香ははっきりした声で

「うん、分かっているから大丈夫。」

と言つてきたのでした。そして、

「あんた、その日何とかしなさいよ。」

と言つてくるのでした。私は嬉しくて、まず親に言い、次に

「父が付き添いますから。」

と言つて主治医に許可を取ろうとしたら、

「元気に食事をしていれば、外泊の許可を出してあげますよ。」

と言つので、ますます、私の病院生活は規則正しいものとなったのでした。そして、後で主治医から聞かされたのですが、私のマドンナのコンサート行きに関して医師達が会議を開いたとの事でした。こうして、マドンナのコンサート前日に私は家に外泊し、父の車で彩香と2人、コンサート会場に行き、そして、あの世界のマドンナのコンサートを見てきたのでした。

そして、その日をかわきりに食事もう度う度食べるのが習慣になり、母に頼んでいた洗濯物も自分で病院の洗濯機を使って、毎日するようになったのでした。そして、外泊も何度もするようになり、退院も間近に迫っていたのでした。

ただ、この後、運命的な出会いが私を待っているのです。

ツヴァイ・・・貴方に会えたから、私は変わったのかな。

私と園子とマドンナ。(後書き)

点滴から解放された私に、友人からマドンナのコンサートに誘われるのでした。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n2362w/>

---

ツヴァイ 第9章「転機」

2011年10月9日14時52分発行